



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 「メンガー文庫マイクロフィルム化・目録改訂・保存事業」について   |
| Author(s)    | 岩本, 吉弘  |
| Citation     | 一橋大学社会科学古典資料センター年報, 14: 25-26   |
| Issue Date   | 1994-03-31  |
| Type         | Departmental Bulletin Paper   |
| Text Version | publisher   |
| URL          | <a href="http://doi.org/10.15057/5476">http://doi.org/10.15057/5476</a> |
| Right        |   |

## 「メンガー文庫マイクロフィルム化・目録改訂・保存事業」について

### On the Project for Microfilming, Revision of Catalogue and Preservation of Menger Collection.

岩本吉弘

IWAMOTO Yoshihiro

「メンガー文庫は世界の学界の至宝である。そして社会科学の学園としての本学のよき象徴でもある」。『カール・メンガー文庫目録Ⅱ』の序で当時の村松恒一郎図書館長がこう述べているように、メンガー文庫は本学が世界に誇る西洋社会科学古典の一大宝庫である。その学術的価値については私がここで繰り返す必要もないだろう。だがこの文庫の利用・保存について、私たちは今まで3つの大きな懸案事項を抱えてきた。つまり、不備の多い現行目録を改訂しデータ・ベース化すること、マイクロフィルムへのメディア転換によって利用の便を飛躍的に増大させること、さらに各資料1冊づつについての劣化状況を調査し全体的な長期保存対策を行うということである。

今回丸善より同文庫のマイクロフィルム版作成の申し出があったのを契機に、宮川センター長、阿部学長の決断によっていよいよこの懸案事項の解決のための総合的な事業に着手することになり、昨年7月よりスタートした。幸い文部省や如水会の援助も得られ、西洋古典籍の利用・保存に関してはまさに日本で過去例を見ない規模と体系性を持った事業となっている。例えばマイクロ撮影については大量の西洋古書を対象とする我が国初の事例である。現在酸性紙の劣化問題を契機に原資料の保存と利用の促進という矛盾する要素をはらんだ2つの問題の両立が図書館界の大きな問題意識であるが、今回の事業ではこの問題に正面から取り組み、西洋の歴史的製本技術と保存の専門家に全面的に加わっていただき、業者側にも多額の出費を依頼して種々の新しいシステムを作った（詳細は岩本吉弘「西洋古典籍のマイクロ化と資料保存」、日本マイクロ写真協会編『月刊IM』、1994年2月号参照）。また長期的な資料保存対策としても前例のない予算規模のものとなり、全資料対象の現在の劣化状況と内在する劣化要因の調査による1冊ずつのカルテ作りに始まり、装訂に関する種々の手当て、酸性紙の脱酸やリーフキャスト処理、新しい書架の導入と書庫内の埃や通気性の改善などの処置を4年計画で行う予定で、すでに昨年度末から一部着手している。

目録改訂とデータ・ベース化の作業も昨年9月よりスタートした。この作業は、改訂というよりもゼロから出発して新しいカタログを作るというのに等しく、またまず学術情報センターへの書誌情報の入力を行ってという作業なので、そのフォーマットに合わせた詳細なカタログングとコンピューター端末による入力作業が必要である。現在のところ1997年度末の完成を目指しているところである。さらにこの目録改訂に関連して、現在判明してきた事実を若干報告しておこう。それは現行目録での合綴資料の記載もれ分の量と質についてである。輸入直後に作成した『目録Ⅰ』には、文庫の中核をなす経済学、社会思想関係書が収録されているが、これには合綴資料がほとんど記載されておらず、戦後の『目録Ⅱ』の作成に際してERRATAの中である程度その見落とし分を補っている。しかしやはりこの作業も非常に不徹底だったのである。現在、撮影の前準備として目録と資料の現物とを照合しており、この中で目録に未記載

のものが抽出されてきている。この段階の作業は本来の目録改訂作業とは異なるため、例えばタイトルページの欠落があるなどの不完全資料は抽出されない可能性があるのだが、それでも最初に作業を着手した *Englische Bücher* 分類約 2,000 冊ほどの中でこの 3 月現在で 56 点の新資料を確認している。この割合で単純に計算すると文庫全体で 500 点以上の未発見資料があるということになるが、戦後の『目録Ⅱ』の収録分には見落としが少ないだろうと考えても、少なくとも 250 点から 300 点は新資料が付け加わるのはまちがいないだろう。とくにラテン語書やフランス語書は英語書以上に現行目録の記述が粗く、また版元製本も少ない。かなりの数の発見があると思われる。

次にその見落とし資料の内容だが、これは文庫の質の高さに比例して見落とし分とはいえ重要資料が多く含まれている。例えば、すでにラテン語書からはグロティウスの 1648 年刊の書簡集（死の 3 年後に出された初版・初刷）が見つまっているし、英語書 56 点の中には著名な人物のものを挙げても、J. タッカー、J. ステュアート、E. バーク、マルサス、トレンズらの著書が含まれる。中でも *A Collection of Miscellanies relative to Coinage in India*. と題する小冊子は、J. ステュアートが 1772 年に東インド会社の依頼でインドの通貨状況を調査する際にごく少数だけ私的に印刷したものと思われ、かつてヒッグズらがゴールドスミス文庫中のものを世界で唯一とまで考えたように（無論この唯一というのは誤解で、イギリスでは他に BL に 1 点あり、アメリカにはハーヴァード大のクレス文庫に 1 点ある）極めて稀覯な資料であろう。

確認された新資料はとりあえず丸善のフィルム版（この 4 月よりセクション毎に随時出版される）に付随されるリール・ガイドに簡略表記で記載するが、その全貌が分かるのは目録改訂作業の完成を待たざるえない。これが完成すれば、我々は輸入後 70 数年にして初めてこの大文庫の正確な全貌を知ることができ、また学情センターのコンピューター・ネットワークを通じての全国各地での容易な検索とフィルム版による即座の閲覧・複写が可能となるのである。このことのもたらす意義はまさにはかりしれない。

（一橋大学社会科学古典資料センター助手）